清花茅隅田川

湯葉・隅田川

著者の諒
解により
検印廃止

昭和36年10月20日　第1刷発行

¥ 320

著　者　芝木好子（しばき よしこ）

発行者　野間省一

印刷所　慶昌堂印刷株式会社

発行所　東京都文京区音羽町3ノ19　株式会社講談社　電話大塚(941)大代表3111　振替東京　3930

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。　（文信社製本）

© Y. SIBAKI 1961.　PRINTED IN JAPAN

目次

隅田川　湯葉　二九　五

装幀

赤坂三好

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

湯

藥

房州に那古船形という土地があるそうだが、私はまだ地圖をだしてみたことがないので解らない。そこに「崖の観音」とよばれる場所があって、海に面して展けた崖のきわにちいさな観音堂があり、その近くのささやかな墓地に正藤そめの墓があった、と祖母は私に語った。祖母は一度だけまだ十三四の娘だった私の母を連れてそこへ墓詣りにいったそうである。

東京に最初の空襲のあった戦争中のある日、見舞やら疎開の報告やらで私が神田の母の生家を訪れると、祖母は顔をみるなり房州のことを口にして、一度那古船形へゆきたいものだといった。空爆が今後もつづくことは確実で、もう老人が汽車に乗るのは疎開のとき以外不可能に思われた。祖母もそのことは知っているのだろうが、崖の観音などと語っている調子はのどかであった。切羽詰ったときも人よりさきに感情を抑制してしまうし、闊達な気性の人なので、聞いていると今にもゆけそうでこちらの気持も和んだ。正藤そめは祖母の伯母で、孝明天皇の皇妹和宮が徳川家茂に嫁してから明治十年に三十一歳で歿するまでその祐筆をつとめた、静

寛院の宮付の人であった。そめ女がどうして房州へ落ちて、そこで人知れず終ったか祖母も多くを知らないから、私には一層解らない。それまで二階の奥座敷が祖母の部屋であったが、防空壕へ降りるのはたいへんだという理由で、階下の土蔵倉に隣接した居間へ祖母は移された。下町の庭はあるかなしの狭さである。裏は露地で、家が密集している。倉のまえの石畳みに植わった篠竹に白い光が斜めに射すのを、祖母は仰いでたのしんでいる。篠竹のわきは防空壕で、蓋をあけて穴蔵へ降りてゆくしかけになっている。祖母はもう何回もその防空壕へ運ばれた。ながい人生の終りが防空壕に結ばれているのは祖母にとっても味気ないことであろう。祖母はこの古い家への執着が強いらしいが、私は速くどこか安全な場所へ行ってくれればよいと思った。生を享けて七十年も東京以外に住んだことのない老女が、人に担がれてゆくのは辛いだろうが、それは日本人の宿命になっている。祖母はそういう心の重荷のためにそめ女のことなど持ちだして、どこで死のうと一生は一生だと思い決めているのかと私は思ってみた。

警報はその日倖いにも鳴らなかった。祖母は私が姑たちと疎開するのを知ると、今日は泊ってゆくようにとすすめてくれた。一時は二十人あまりも住んでいた家が、今は祖母と伯父夫婦だけになっているので、どこかさびしい。その晩、持参の弁当をつかうとき、祖母と伯母はあれこれ気を配ってくれた。この人達は忙がしい生活に馴れてきたので、手速く作ってくれる惣

菜や漬物が大層うまい。伯母の運んできた清汁椀には菜っぱのほかに湯葉がはいっていた。

「まあめずらしい、ゆば」

と私は聲をあげ、椀に見入った。湯葉は島田ゆばであった。もう東京に滅多に湯葉をみることもないときに、祖母はどれほど丹精して保存しておいたものかと思った。祖母は老いても肌理のこまかい小ぶりな顔にうれしそうな笑みを泛べて、

「源さんの息子が最後の釜であげたといって持ってきたものですよ」

といった。

伯母もまじえて私達は思い思いに湯葉を語りあい、汁をすすった。湯葉は私の母の秋津が生前よく食膳にのせたので私は好物である。湯葉は黄褐色に縮れて蝶形に結ばれ、舌ざわりは少ししこって、しかも柔らかく、特有のほろい渋さと仄かな甘さをたたえた味わいには、床しい滋味があった。湯葉はもう私達の日常から姿を消した食品の一つだが、そのことを祖母は自分の罪でもあるように感じている節がある。昔の湯葉に纏わる話を祖母は一夜私に語ったが、それは祖母の生きた日の形見であろう。もし祖母がある詩人のうたった、

わが草木とならん日に
たれかは知らむ敗亡の

歴史を墓に刻むべき

という詩を知ったら、それは私のことですよといったに相違ない。祖母は明治七年生れ、名は蕗、そのとき七十一歳であった。

牛込矢来の家から神田須田町にでるためには、当時大曲を経て神田三崎原とよんだ草蓬々の原っぱを抜けてゆくか、駿河台地の北を崖について下ってゆくか、その二つであった。明治二十一年のある初秋の一日、正藤主馬と娘蕗は人力車に乗ってお茶の水の崖上まできた。このあたりの崖下は百尺に及ぶ渓谷で、鬱蒼と樹木に覆われながら底に川を抱いていた。川は神田川で澄んだ川面に小舟が渡っていた。主馬はこの人通りの少い崖際までくると俥を停めさせて、蕗にも一息入れるようにといった。若渓とよぶこのあたりの自然は翠色滴るばかりで、蕗にも目を洗う清々しさであった。夜になると狐の啼くさびしい崖合に、朝靄が切れて陽が耀いていた。もうここからお茶の水橋を渡って暗闇坂を降りてゆけば、すぐ須田町に出る。主馬も蕗もまだ美濃屋の構えをみたことがなかったが、蕗は今日そこへ養女としてゆくことになった。主馬は数えて十五歳の娘を顧りみて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「疲れたか」

とたずねた。顔も身體も小ぶりで前髪のちいさい髪に結い、美濃屋から届いた鳶八丈の着物にお染帯を締めた蕗は、疲れなどみたくもない艶々した頬と黒く光った瞳をもち、活気にあふれた表情をしていた。蕗には自分が他家へゆくよりも衰えた父を残すことのほうがはるかに気懸りであった。主馬はこの十年間に人生から脱落していた。まだ小石川安藤坂に住んでいた圓かな時代、その邸から十歳年上の姉が打掛を着て嫁いでいったのを蕗はおぼえていたし、母と伯母が語らっていた明るい光景も記憶に残されている。しかしその後この家を捨て、転々と居を移すにつれて逼迫していった速度はおどろくばかり速い。徳川家瓦解のあとの禄を離れた人達はみなこんなだったろうか。蕗が十三歳から住みついたのは矢来の崖下の柳長屋であった。崖にもたれて並んだ長屋の足許を土止めして、その下にさらに低い長屋が並んでいる地帯である。細い石段一つが通路で、長屋門のわきに柳が植わっていた。その通路の真中に共同井戸があって、蕗はそこにかがんでちいさな手で米を磨ぎ、洗いものをした。米のある日はよかったが、なにもなくなると蕗は途方に暮れた。主馬は食膳がでないと、そうかといって黙っている。主馬は子供に読み書きを教えていたが、生計が立たなかった。この界隈の地の理からいって無理だった。やがてゆき着くところへくると、彼は江戸を捨てる気になった。長女の婿が士分を離

れたとき、政府から下賜された土地へ移って静岡にいる。そこへゆけば死水はとってもらえた。主馬が娘を手放す気になったのは、娘一人だけでも江戸へ残しておきたかったからである。

はじめ主馬は亡き妻の妹に相談して戸田邸へだしたいと考えた。そのとき美濃屋の話が降って湧いたのだった。美濃屋の内儀は妻とは従姉の関係で息子一人しかなく、かねて身内から女の子を欲しがっている。蕗なら利発だからよかろうというのだった。主馬は決めかねて戻ったが、戸田邸へやる気だった。しかし蕗は「戸田様へゆくか」という問いには無言で、美濃屋がよいか」と訊かれると「はい」と返事をした。主馬は理由をたずねたが蕗はただなんとなく美濃屋のほうがよいと感じたのだった。

「自分で選んだのなら、それでよいだろう」

と主馬は気弱くいった。

娘を伴なって駿河台地を見納めることが、主馬の江戸の見納めになった。崖下の川は目が眩むほど底深い川面であった。

「美濃屋の主人は一代で産を成した人だけに大層厳しい、仕事一徹の人だそうだ。しかし内儀は助けてくれるだろう。どこであれ、これからゆくところが蕗の家だ」

主馬はそれだけいって、俥に乗った。

お茶の水橋を渡って大名屋敷のある高台から町中へ降りてゆくと須田町はもうすぐだった。銀座から日本橋を経、神田須田町のめがね橋（万世橋）を渡って御成街道を上野へ、さらに浅草へゆく道筋は、明治年間から大正へかけて東京の主要な繁華街をぬう幹線道路であった。下町の殷賑ぶりを反映して商家も瓦葺土蔵造りの家が多く、隅田川にそそぐ川筋が途中に引かれていた。神田須田町は人の往来が繁く、当時東京一の交通量を誇っていた。美濃屋は須田町の表通りを一つ逸れた横通りの角にあった。二階建ての堅牢な土蔵壁で、窓はちいさく観音開きにそとへ開いた。階下の店先は入口に暖簾が掛って、暖簾は濃茶に「湯葉」と白く染めぬいて、左端に美濃屋と記してあった。蕗はそのときまでこの店がなにを商う店かも知らなかった。そとからくると店のなかは小暗かったが、ざわついている気配のなかで、大豆の煮立った甘くあたたかい匂いがたゆたっていた。

店の内は土間が左へ鉤の手にずうっと伸びて、仕事場に通じていた。片側は店から帳場、奥の間とつづいていて、途中の廊下に階段がついていた。左手の土間の奥は厨で、そのわきに掘井戸があり、そこからさきは廣い仕事場であった。主馬と蕗は奥の間に通された。そこは狭い庭に面していて、渡り廊下の端から仕事場の横にかけて土蔵があった。そのとき歌は髪結に髪を結上げさせたところであった。女にしては大柄の面長な四十四五の年配で、眼尻のやや釣上

った顔はきつくみえた。商家の内儀らしく黒襟ぐんかった袷で、髷には浅黄の手柄が掛っていた。歌は蕗を最初に一瞥して、

「ちいさな娘だね」といい、「身體は丈夫だろうね」と念を押した。

蕗は怯んだが、自分で選んできたことを忘れまいと考えて、

「はい」と返事をした。

「店は忙しい商いだから、確かり働いてもらいますよ」

歌は癇性に襟へ手をやって衣紋をつくりながら、主馬にむかって商家の休みのない日常を愚痴とも自慢ともつかず喋った。その合間にも女らしい吟味の眼差を蕗へそそいだ。土間からは若い衆が生の湯葉を運び、女中が受けて二階へ運んでゆくのがみえた。歌はその指図をした。中の間には乾燥した湯葉を加工している女中の姿がみえたし、歌のまわりにも湯葉のはいった籠があって、やりかけのままになっていた。歌は坐ったままで女中たちの名をよび、つぎつぎと用を吩咐けた。女中がいないと店の小僧をよび、客の姿にも敏感で、あちこちに目を配っていた。その合間に主馬へいつ静岡へ発つかとたずねたり、蕗に縫物はできるかと問うたりした。恐らく問う端から忘れるだろうと思うほど、せわしない応対であった。家全体ががさつなほど活気に充ちた空気で、落着く暇もなさそうだった。蕗はそのことに驚きながら目を動かして、

速くその状態に馴染みたいと思った。あの崖底の逼塞した生活から脱出したいと願っていた蕗は、その活気にふれると、明るい光の方向へ手足を伸した思いで、少しも嫌ではなく、弾んだ気持になっていた。朝のうちの繁多な用事のためにやがて歌は店へ立ってゆき、主馬と蕗はそこへ残された。

仕事場からそのとき恰幅のよい五十歳がらみの落着いた男がでてきて、土間からなかの間にあがったのを蕗はみた。顔の厳つい、身體のがっしりと重い堂々とした男で、今まで仕事に没頭していた人間の張りが表情に溢れ、動作もきびきびとしていた。彼は歌をよびながら自分からさきに主馬と蕗の残されている部屋へはいってきた。それが美濃屋の主人の吉衛であった。彼が坐ると、その部屋はにわかに充実したものになった。吉衛は二人にむかって心待ちしていたと慇懃にいった。蕗は身を引緊め、両手をついて挨拶をした。歌がはいってきて用件を告げると、彼は適当な判断をし、それがすむとまたこちらをむいて蕗をじっとみた。眼窠の奥に鋭い光を湛えた強い視線であった、蕗は眩しく眼をあげていた。

「湯葉は好きか」

吉衛はそう訊いた。蕗は今日まで湯葉を食べたことがかりノに思った。

「なに、食べたことがない？」

彼は不本意そうに眼を剝いて、まえに置いてある籠のなかの黄色い湯葉を一つ取りあげた。
「食べてごらん」
吉衛は切れ端を自分でさきに口へ運んでいった。蕗は生乾いた湯葉のしんなりしたのを口に嚙みしめてみた。乳くさく甘く、こくのある味は舌の上に親しみ深くのって、嚙んでゆくほど唾液にとけて味わいのあるものになった。吉衛は蕗の動く口許と表情をみていた。
「美味いか」
「はい」
蕗が確信のある表情で頷くと、吉衛の厳つい顔にはじめて笑みが浮んだ。歌が大きな聲で、
「なにが美味いものですか、私は嫁にきたときこの大豆の匂いに当って、むかむかした」
とずけずけいった。吉衛はべつに気にする風もなく湯葉の生ぼせを手にして、その細い長方形の湯葉を三つ折にし、真中を縮らせて蝶ネクタイ風にして昆布で結んでみせた。蕗はやってごらんといわれて、その通りにやってみた。蕗のちいさい手は敏捷に動いた。
「これは器用な娘だ」
吉衛は細い昆布を巻くのにきりきりと外巻にからめて、結び目を引くこつを示した。蕗はみて、すぐ同じにしてみた。吉衛の太い武骨な指が柔軟に動いて、湯葉を結ぶ速さは目にもとま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.